



日本列島 創薬探訪

—— セルメディシン ——

全国の医療機関と提携して「自家がんワクチン療法」の普及を進めるセルメディシン。大野忠夫社長は理化学研究所(理化研)での社内ベンチャー設立を経て独立、がんの再発防止・転移予防に向けた技術開発を進める。同療法は自由診療のため何かと制限も受けるが、すでに黒字化を達成し株式公開への意欲も衰えていない。

術後の補助療法

自家がんワクチン療法とは、そもそもどういうものなのか。

大野社長によると、まず手術で取り出した患者のがん組織をホルマリンに漬けてがん細胞を完全に殺す。それを自社開発した免疫刺激剤と混ぜる特殊加工を施し本人に注射、体内で活性化された免疫細胞ががんを攻撃する——というメカニズムだ。

通常、がんの病理検査はホルマリンに漬けて固めた組織をパラフィンに埋め込み、2〜数十ミクロンという薄い切片にして診断する。残った大部分の組織は3ヵ月程度保管した後に廃棄されるが、このなかにはがんの特徴を示す「がん抗原」が大量に存在するため、捨てずに有効利用する技術を確認してワクチン開発へと結びつけた。

投与は手術後となり、抗がん剤

1000例の治療実績を積んだ 究極のパーソナルドラッグ

が効きにくい「スローながん」が主なターゲット。この自家ワクチンによって体内で誘導されるキラー細胞は、正常細胞と隣接しているがん細胞もシャープな選択能で攻撃する。副作用もほとんどない。「個人の組織を個人に使う、究極のパーソナルドラッグです」(大野社長)。

治療実績は肝がんと脳腫瘍でデータが論文発表されている。下図に見られるようにワクチン投与群での再発は3例にとどまり、延命効果も示されている。また、脳腫瘍のうちでも難治性のGBM(多型膠芽腫)で、12例のうちCR(完全寛解)1例、PR(部分寛解)1例で奏効率17%という結果も得られている。

35%に臨床的改善効果

セルメディシンは2003年に理化研を離れて完全に独立した。大野社長は「大規模な施設も不要

肝がん再発抑制効果・延命効果



